

第三回日仏セミナー

新世紀の材料電磁プロセッシングに出席して

田川俊夫(九州大学)

平成13年7月3日から7月6日までの4日間、第三回日仏セミナー「新世紀の材料電磁プロセッシング」がフランスのシャモニー・モンブランで開催された。参加者は両国を中心にして40人ほどであった。前回のセミナーは平成11年4月に日光で開催され、フランスからの参加者にとっては日本文化に触れる機会となったが、今回は日本からの参加者がフランスの大自然に触れる好機を得た。シャモニーは、その昔一人の登山家がモンブラン登頂に成功したことから一躍脚光を浴びることになった小さな町であるが、現在では季節を問わず観光客で賑わっているとのことである。ここでは、日仏セミナーの模様やシャモニーという町の印象などを報告したい。

今回のセミナーは、シャモニーの中心部から10 km程離れた「Chalet Pierre Sémard」という小奇麗なペンションの会議室で行われた。宿泊や食事もまた同じ場所ということで、食事中にも交流の実を上げることができた。今回のセミナーにおけるフランス側の責任者は、EPM-MADYLAM研究所のPascale Gillon博士(女性)で、この第三回日仏セミナー全般を取り仕切った。一方、日本側の名古屋大学の浅井教授は、最初に、「Recent Activities on Electromagnetic Processing of Materials in Japan」という演題にて、このセミナーの意義に始まり、Lorentz力と磁化力を利用した様々な材料プロセッシングの展望を講演した。もう一件の展望講演は、EPM-MADYLAM研究所のDurand Francis教授で、「20 Years of Inductive Cold Crucible at MADYLAM: From Titanium to PV Silicon」という題目であった。その他、講演初日には、「Steel making」、「Cold crucible induction melting」という二つのセッションで合計7件の口頭発表が行われた。

セミナー開催二日目の午前中には、セミナー主催の「氷の海」ツアーが組み込まれた。このツアー参加者たちは、シャモニーの中心地から真っ赤な登山列車に乗り、標高約2000メートルのMontenvers駅に到達した。向かい合った列車の座席は、山側の座席に座っている人が座面を滑り落ちないように座面の傾斜を考慮したものとなっていた。切り立った険しい山々の間に「Mer de Glace」と呼ばれる「氷の海」を一望しつつ、ケーブルカーで氷河の入り口まで降り、ひんやりとした氷河の中を探索した。

開催二日目の午後のセッションは、「Magnetization force in materials processing」であり、磁化力に関する5件の講演がなされたが、磁化力はローレンツ力とならんで今後の材料電磁プロセッシングの2大柱となるとの印象を得た。

二日目の夜は、Gillon先生の心にくいばかりの計らいで「シャモニーの自然を映し出すスライド上映会」が催された。説明者である写真家は、当初スライドを見せながらフランス語と英語の両方で説明していたが、途中からフランス語のみとなり、日本人には退屈なものとなってしまったのが残念であった。しかし、あのスライドの美しさには強く印象づけられた。

三日目には、不純物除去や磁化力についての講演が合計10件あり、熱い質疑応答が繰りひろげられた。驚いたことには、フランス人同士が英語で議論している間に、お互いあまり真意が伝わらなかったのか突然フランス語に切り替わり、その場にいた日本人はあっけにとられる場面もあった。幸いにもその場の座長であったGillon先生が、討議の内容を英語に翻して事なきを得るという一幕もあった。

三日目のすべての講演終了後、ビールが全員に振舞われた。おつまみを片手に時折ビールを飲みながらMADYLAM研究所の学生さんたちと話していると、派手な衣装を身に纏った男性四人からなる音楽隊の愉快的な生演奏がなされ、セミナーは通常の国際会議とは一味異なるアットホームな雰囲気になった。

今回のセミナーでは、材料電磁プロセッシングという分野をリードするフランスと日本より28件の口頭発表がおこなわれ、両国間の研究交流と親睦を深めるという意味で大きな意義があった。また今回のセミナーのようにフランス側から二

名の日本人が参加し、セミナーの盛り上がり大きく寄与したことも注目に値する。今後、3年ごとのEPM国際会議(前回は2000年、名古屋)と並列して、第四回、第五回とますますこの日仏セミナーが続いていくことを期待したい。なお、CNRSの工業部門の責任者であるGagnepain氏がセミナーの後半にわざわざバリから駆け付けられた。このことはCNRSがこのセミナーに大きな期待を寄せていることを物語るものと言えよう。最後に、このセミナー全般のお世話をくださったMADYLAM研究所のGillon先生、名古屋大学の浅井教授、熊本大学の小塚助教授、そしてスポンサーである日本学術振興会に厚く御礼申し上げたい。

(2001年11月2日受付)



参加者の集合写真